

現役・神楽員が伝える魅力

interview



金鑽神楽杉田組保存会
飯塚 聡史さん 門倉 正美さん
次世代の若き神楽員

29歳の幼馴染2人が神楽を始めたのは3年前のこと。飯塚さんのお父さんが神楽員であったことをきっかけに、練習に参加することに。「最初はあまり乗り気ではなかった」という2人も、今では、撮影した映像を見直し、お互いに指摘し合いながら、より良い神楽を奉納しようと日々練習に励んでいます。その魅力について2人は、「おどけてみたり、驚かしてみたり、実際にやってみるとおもしろかった。お客さんが見てくれることは、プレッシャーであり、楽しみの一つ。自分の神楽でお客さんが喜

んでいるととてもうれしい」と言います。また、「その舞がどういうものなのか理解して見ると、より神楽を楽しむことができる。自分たち自身、やる側になってこういうことかと理解して、より楽しめるようになった」と続けます。杉田組では、見る人により興味をもってもらうため、神楽奉納時に、文章での説明に加え、マイクを使い解説を行っています。「お客さんにもっと興味をもっと楽しんでもらえるよう工夫していきたい」と笑顔で話す2人。若き神楽員が担う杉田組のこれからが楽しみです。

神楽を始めて30年以上の五十嵐さん。「笛が指揮者となり、舞に合わせて囃子を鳴らす。同じ座を舞っても、舞手の違い、その日の体調など、そのときそのときで全く違うものになる。それが難しいところであり、無形文化財のいいところだ」と神楽の魅力を語ります。時代の流れで衰退してゆく神楽。五十嵐さんは、「なんとか少しずつ右肩上がりに持っていきたい。まずは、存在を知ってもらって、その良さを間近で見て共感してもらいたい」と、神楽の拠点を社務

所から人を集めやすい諏訪しぜん亭に移し、親子神楽教室の開催や子ども会などを巻き込んだ普及を目指しています。「どんな宝物よりも命の方が尊い。一生懸命頑張ればいいことがある。神楽の舞には道徳的な要素があり、人生において大切なことを教えてくれる。スマホやパソコンからは得ることができない情報やつながりがそこにはある」と熱く語る五十嵐さん。移り変わる時代の中で、揺るがずに変わることのない大切なもの。神楽はそれを伝え続けています。



金鑽神楽本庄組保存会
五十嵐 保久さん
熱き神楽伝道師

2017～2018 神楽スケジュール

4月	4日(火)	産泰神社(四方田)	杉田組
	9日(日)	城山稲荷神社(本庄)	本庄組
	16日(日)	八幡大神社(牧西)	宮崎組
岩上神社(児玉町太駄)		太駄組	
9月	3日(日)	阿夫利天神社(中央)	本庄組
		金鑽神社(西富田)	杉田組
10月	15日(日)	八幡大神社(牧西)	宮崎組
		諏訪神社(寿)	本庄組
		金鑽神社(千代田)	本庄組
11月	3日(祝)	金鑽神社(千代田)	本庄組
1月	2日(火)	金鑽神社(神川町二宮)	杉田組
2月	11日(祝)	稲荷神社(太駄)	太駄組

神楽は人から人へと伝える無形民俗文化財。伝承するためには、担い手が必要不可欠。しかし、神楽そのものに関心が薄くなっている現在。その担い手を見つけることは難しくなっています。はるか昔から、人から人へと伝えられ、また人と人とを結んできた神楽。その神楽を絶やさないために、まずはみなさんが関心を持ち、神楽を見て、知って、楽しむことが必要です。まだ知らない人が多い神楽の魅力。人から人へとつながれた伝統と想い。その想いに、その伝統に触れてみませんか。



Let's watch



Miyazaki-KAGURA

金鑽神楽宮崎組

途絶えかけた伝統。

もう一度つむぐー

担い手不足、時代の流れ。
市内でも昭和56年に根岸組が、平成19年に宮崎組が休止を余儀なくされました。**伝統が途絶えかける**
「寂しさはあった。このまま宮崎組が終わってしまふのかと」そう語るのは、神楽を始めて40年以上、家族で代々神楽を受け継いできた金鑽神楽宮崎組の平野克幸さん。
主要メンバーが病気などで現役を退き、それをきっかけに平成19年に休止した宮崎組。それからずっと宮崎組を復活させたいという気持ちを持ち続けていたという平野さん。
復活への動き
復活へと動き出したのは、2年前。当時の社員の役員であった石橋淳一さんが、世話役の黒澤克彦さんに「復活へ動きたい。協力してくれ」と持ち掛けたことがきっかけ。

「復活させるためには、一人二人の勧誘ではだめ。サークルごと誘ってきて、仲間同士でその楽しさを知ってもらわなければ」と言う平野さんは、自分が所属し、石橋さんが監督を務める地元のソフトボールチームのメンバーに呼びかけ、練習に参加してもらうこと。
「練習後の話し合いを大切にしていく。そこで練習を振り返るとともに、たわいもない話で盛り上がり、また次の練習を頑張ろうという雰囲気作りをしている」。平野さんが大切にしているのは、コミュニティとしての保存会の存在。ただ伝承するのではなく、そこにみんなが集まりたいと思わせる仕掛け。その結果、誘ったメンバーのうち7人が加わり、16人の保存会として復活することに成功しました。
伝統をつむぐ
「休止前にいたメンバー

の記憶の部分部分をつなぎあわせることで伝承することができた」と話す平野さん。若い頃から目で見、耳で聞いてきた神楽。記憶を辿り、つないでいくことで、またその伝統を継承することができました。休止期間がもう少し長くなっていたら、それは難しかったのかも知れません。
復活の奉納
平成27年春頃から本格的に練習を重ね、同年秋の八幡大神社への奉納で見事復活を遂げた宮崎組。「よくここまでこれたと思う。これだけ座を行うことができてうれしい。参加してくれた一人ひとりが努力してくれた結果」と平野さんは振り返ります。
さらなる伝承へ
「これまでのやり方だけをやっているのは、時代にそ

八幡大神社
(牧西 557-1)
4月16日(日)
午前11時～
午後3時30分頃

Google マップ

ぐわなないこともある。伝統を守りながら、次へとつないでいくため柔軟に対応していきたい」。宮崎組は、現在は4月16日の八幡大神社への奉納に向け毎週練習を重ねています。また、秋には休止以来行っていない御穂崎を奉納する予定です。再び燃え上がった神楽の灯火。絶えることなく、燃え続けることでしょう。



▲「シャンシャン」と鈴の振り方を説明する平野さん